

## 高齢社会白書を読んで

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

**早**いもので、私は昨年65歳の誕生日を迎えた。年齢3区分でいうところの高齢人口の仲間入りをしたということである。

そのようなこともあり、「高齢社会白書」(内閣府)を読んでみた。高齢化の状況や、政府が講じた高齢社会対策の実施状況、および今後講じようとする施策が纏められている。

**白**書には様々な統計やアンケート調査結果が掲載されているが、その中で目を引いたのは、就労意欲の強さである。現在仕事(収入のある仕事)をしている60歳以上の者については、約4割が「働けるうちはいつまでも働きたい」と回答している。70歳までまたはそれ以上との回答と合計すると、約9割に上る。65歳までとの回答は約1割に過ぎない。私自身も「働けるうちはいつまでも」と考えている口であるが、高齢者の就業意欲の強さは想像以上であった。今後の日本の人手不足の深刻化を考えると、高齢者活用の余地はまだまだ大きいように思われた。

ただし、その実現に向けては、受け入れ企業側で、短時間・短日数勤務などの柔軟な働き方や、肉体的負担を考慮した作業環境の見直しなど、間口を広げる工夫が必要である。また、働く高齢者としては、個人々のワークエンゲージメント(熱意、活力、没頭)が刺激されるような仕事が見つかることが望まれる。ニッチな分野のマニアックな仕事との出会いが生まれるよう、人材紹介会社のマッチング情報充実なども期待したい。

**就**労と並んで、生活のリズムを形成するのが学習・社会参加である。65歳以上の者で何らかの学習活動に参加している人は3割に上る。学習の分野をみると、「家政・家事(料理・裁縫・家庭経営など)」、「芸術・文化」、「パソコンなどの情報処理」が上位を占めている。社会活動への参加状況では、「1年間に活動または参加した」人は5割に上るが、「健康・スポーツ(体操、歩こう会、ゲートボール等)」、「趣味(俳句、詩吟、陶芸等)」が多い。

時間的余裕が生まれたことで元々やりたかったことを実現した人、今後の有用性を想定しつつ始めた人、何かの縁でたまたま始めてハマった人。事情はそれぞれであろうが、幾つになっても明日のために学び、鍛えるという姿勢は大切にしたい。

**も**う一つは、高齢者のコミュニケーションに関するコロナ禍の変化である。コロナ禍で人と直接会ってコミュニケーションをとることが「減った」と回答した割合は6割を超えているが、そのうちの約3割が、直接会わずにコミュニケーションをとることが「増えた」と回答している。コロナ禍という環境変化が、最新テクノロジーを使ったコミュニケーション・ツールの新規活用につながった可能性があり興味深い。

余談になるが、私は、高齢者にとって、今この時代を生きるコミュニケーション術としては、若い世代と接点をもつことの効果が絶大だと感じている。(当コラム2019年11月号「世代を越境して同時代性を保つ」参照)

今の若者はLINEなどのやり取りで句点「。」は避けるのだそうだ。「。」からは威圧感や怒りの感情を読み取ってしまうのだと。私はこれを記事で読んでびっくりしたのだが、確かに若い世代のX(旧Twitter)の投稿などをみると、皆「。」の代わりに絵文字や「!」を使っていた。それ以来、私も若者向けには「。」を使わないよう気を付けているのだが、こうした予期せぬ世代間ギャップを知っておくことは、同時代をスマートに生きるための一つの心得だと思う。

**人**生100年時代と言われる現代。高齢者と呼ばれるようになってからも、何かに打ち込み、日々の生活に意味を持たせることは大切だ。もちろん健康あつての日常活動なのだが、そうした意味ある活動が健康寿命を延ばすという側面もあろう。高齢化が進む日本社会。高齢者の日々の活動が、日本の活力を大きく左右するといっても過言ではないだろう。